

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：34437
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2020～2023
 課題番号：20K00877
 研究課題名（和文）日本の伝統文化CLILにおける英語の文字指導を重視した教員研修プログラムの構築

 研究課題名（英文）Building a Teacher Training Program Focusing on English Alphabet Knowledge Instruction in Japanese Traditional Culture CLIL

 研究代表者
 伊藤 由紀子（ITO, YUKIKO）

 大阪成蹊大学・経営学部・准教授

 研究者番号：20804826
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本の伝統文化や伝統工芸を扱ったCLIL（内容言語統合型学習）授業において音声から文字へのスムーズな指導を目指し、小・中学校での体験型授業実践を行った。その結果、英語の音声を自然に受け入れる体験型CLIL授業を通して、児童生徒の「使える英語」の学習意識とともに、日本の伝統文化・伝統工芸への興味・関心が高まった。また、音声や文字に着目した教材による活動が、英語の文字への興味を促すことにもつながった。さらに、教員研修としては、CLILを取り入れたい教員を対象に、CLILのアイデア共有や音声や文字の指導方法、教材の使い方等を中心に研修会を実施し、授業実践時のサポートを行うことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、外国語指導において日本の伝統文化・伝統工芸を扱うCLIL授業を行い、日本文化を英語で伝えたいという児童生徒の積極的な態度の育成を目指した。近年はグローバル化が進んでいるが、日本の良さを発信する力の育成もまたグローバル教育の一つである。しかし音声から文字への移行期につまずき、英語嫌いになる児童生徒は少なくない。そこで教員が適切な指導ができるよう研修を行い、自信を持って指導できる教員養成に貢献した。教科書にはCLILの視点が入り入れられているが現場では新しい指導に対する戸惑いも見られる。その点からも本研究は教員に寄り添い自信を持って指導できる教員の養成という社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this study, an active learning CLIL class focusing on Japanese traditional culture and crafts was conducted at elementary and junior high schools, aiming at students naturally adopting written English skills through the aural teaching of alphabet knowledge. It was found that students' interest in Japanese traditional crafts increased as well as their awareness of learning "English for use". In addition, the activities featured in the teaching materials that focused on sounds and letters helped promote interest in written English. Regarding teacher development, training sessions were conducted for teachers interested in adopting CLIL in their own classes, concentrating on methods of sound and alphabet instruction and how to use the teaching materials. Teacher support during the classes was also provided.

研究分野：外国語教育

キーワード：CLIL 伝統工芸 音声指導 文字指導 教員研修プログラム 小中連携 教科横断型

様式 C-19、F-19-1(共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究では、これからの社会を生き抜いていくために、日本の伝統文化・伝統工芸を扱う CLIL 指導を通して、自国の文化を英語で発信できる英語力と自信を身に付け、かつ外国の文化を受け入れ、地球上のさまざまな文化を持つ人々と協働するグローバル社会の一員となる子どもを育成するとともに、そのような人材を指導できる教員養成を目指す。

近年、日本を訪れる外国人は年々増加している。海外へ行かずとも外国人と触れ合う機会が増えている中で英語教育の必要性はますます高まり、外国に日本文化を伝える機会が今後も増えるだろう。外国からの文化や情報を取り入れるとともに日本の良さを英語で広めていく力を持つこともまたグローバル教育のひとつであり、必要な力であると考え。2020年から小学校で英語が必修化された。外国語教育の初期段階は非常に重要で、児童は音声を中心とした学びから、文字の読み書きへと進み、聞く、話す、読む、書く力を身につけていく。しかし、英語の文字指導は容易ではなく音を操作する音韻意識の獲得には長い時間を要する。これまでの小学校外国語活動の成果で、英語の音を聞いて意味がわかるようになったが、中学校で書く活動が増えると、せっかく身につけた音韻意識の力を活用できず、テストで点数が取れないため苦手意識を持つ生徒が増える。それを防ぐためには、小中連携の文字指導をスムーズに進めるための、丁寧で段階的な(スモールステップ)指導が必要である。また学習指導要領では、教科単独では生み出し得ない教育効果を複数の教科の連携により実現する「教科等間の相互の関連」の重要性が示されている。そこで本研究では他教科の内容を英語で教える CLIL(内容言語統合型学習)に着目し、日本の伝統文化・伝統工芸という題材を用いた体験型の授業を行う中で、音声指導からスムーズに文字指導に連携できる段階的な指導を検討する(図1)。さらに現場で誰でもこれらの教材が使えるよう定期的な研修プログラムを構築し往還型で教員サポートを行う。

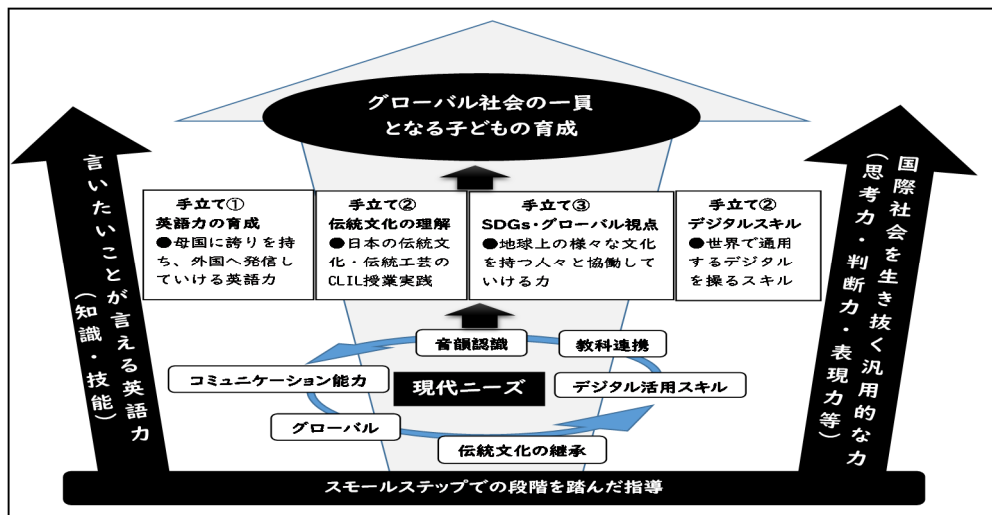


図1 現代ニーズと本研究でめざすこと

2. 研究の目的

- (1) 小学校において、各教科を連携しながら日本の伝統文化を扱う CLIL 授業を通して「音声と文字の段階的で丁寧な(スモールステップ)文字指導」に注目した教材を開発する。
- (2) 現場の教員研修プログラムを構築し、往還型で小中連携の文字指導についてのサポートを行い、自信を持って英語指導に臨める教員養成に貢献する。
- (3) 全国の教員が活用できるように HP 等で公開・配信する。

3. 研究の方法

研究の方法として、小中の授業においてスムーズな連携が図れるよう研究協力校での **CLIL** 指導に取り組む。**CLIL** では、実際の場面で使いながら学ぶ指導を積み重ねることで自然に使い方を習得することができる。実践の内容としては、日本の伝統文化・伝統工芸を扱う。伝統文化・伝統工芸に関わる学びの重要性については学習指導要領にも明記され、各教科や総合的な学習の時間での取り組みが求められている。本研究では、英語科と図画工作科・美術科に焦点を当てて教科横断型の授業実践を行う。授業実践後には、児童生徒の英語での授業の理解度、英語学習への意識の変容、伝統文化・伝統工芸への理解などをアンケートより分析し、まとめる。

学校現場では近年 **CLIL** が注目されるようになった。実際に授業で **CLIL** を取り入れている教員はまだ多くはないが、興味を持っている教員は少なからず存在する。そのような教員を対象に、小中学校で **CLIL** の授業実践を行いながら、同時に教員研修プログラムの構築も進めていく。

4. 研究成果

(1) **CLIL** 授業実践

関西の公立・私立小学校、中学校を中心に、日本の伝統文化・伝統工芸を英語で行い、実際にものづくりを体験する **CLIL** 授業を行った。以下は実際に行った授業実践である。

- ・水引細工(公立小学校 4 年生、6 年生) **2021**
- ・絵ろうそく(私立小学校 3 年生、公立中学校 2 年生) **2022, 2023**
- ・マジョリカタイル(公立小学校 4 年生、6 年生、中学校 2 年生) **2022, 2023**

【実践の結果】

関西の公立小学校 6 年生および中学校 2 年生を対象に行ったマジョリカタイルの授業について、児童生徒の事後アンケートの結果について以下のことが認められた。まず、小学校 6 年生 ($N=29$) に関しては、英語・図工に関して普段の英語の授業が好きかという質問に対する回答の平均値は、最大値 4 のうち **2.90**、図工の授業が好きかという質問では **3.10** であった。そして、授業が楽しかったという児童が **3.62**、英語での授業内容がわかったという児童が **3.14** であった。図 2 は英語での授業内容の理解度に関する回答の人数分布である。「まあそう思う」が 23 名で最も多い。少しトークの難易度が高かったが、大まかに理解できたことがわかった。日常生活や外国語科の教科書では学習しない英単語だが、体験しながら学べたことがわかる。ここから、教師はほぼ全ての授業を英語に進めたにもかかわらず、事前にはマジョリカタイルについてほとんど知らなかった児童が授業の内容を理解できたことがわかった。しかし、小学校においては、英語のレベルはもう少し工夫する余地があるように思われた。

同じマジョリカタイルの授業を中学校 2 年生 ($N=61$) でも実施した。アンケートの結果から、普段の英語の授業が好きかという質問に対する回答の平均値は、最大値 4 のうち **2.84**、美術は **2.70** であった。事後では、授業が楽しかったと回答した生徒が **3.75**、授業内容がわかったと回答した生徒が **3.52** であった。図 3 は同設問の回答の人数分布で、「とてもそう思う」が 34 名、「まあそう思う」が 25 名である。中学校では多くの生徒が英語での授業内容を理解できていたことが認められた。

次に、児童生徒が本授業を受けて何を学んだと感じているかについて、小中学校の記述アンケート「授業の感想」を合わせて整理して図解化し、質的に分析した(図 4)。図を描く際には、「英語」「マジョリカタイル」「創作・表現活動・鑑賞(タイルづくり)」「異文化・グローバルな視点」の 카테고リーに分けてから、それぞれを繋ぐコードを間に配置して関係性を示した。小中

どちらにも出てきた回答は無印、小学校のみ、中学校のみの回答は「小」「中」で示した。この図から、児童生徒が授業を通してマジョリカタイルの存在やその歴史、デザインの美しさを知り、デザインから「対称」や「垂直」「平行」などの図形に関する英語表現を知ったこと、実際に英語でオリジナルタイルづくり体験をしたことで工芸品について多くを学べたと感じていることがわかった。そして「英語」「マジョリカタイル」「創作・表現活動・鑑賞(タイルづくり)」は独立したものではなく、図形の英語を覚えながらタイルを鑑賞したり英語に触れながらデザインをしたり、体験しながら創造の喜びを感じたりして、相互に関係しながら学びを深めていたことがわかった。またこのような授業を受けたいという声が多く、学習意欲が向上したことも認められた。さらに「異文化・グローバルな視点」で見たとき、児童生徒はタイルを通して世界との繋がりを感じていた。カタカナでも聞いたことがある英単語を頭に入れ、図形の既存知識と繋ぎ合わせて意味を理解して、その概念を応用しながらタイルを作ったことがわかった。

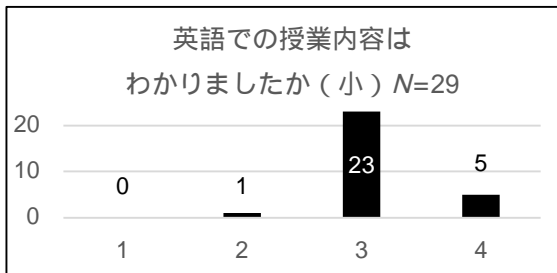


図2 理解度を問う設問の人数分布(小)

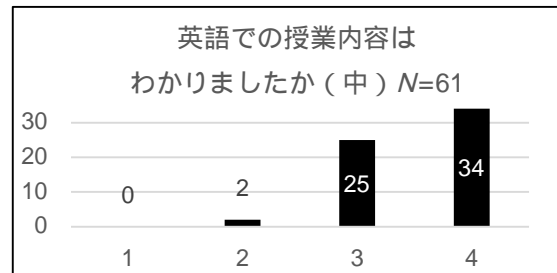


図3 理解度を問う設問の人数分布(中)

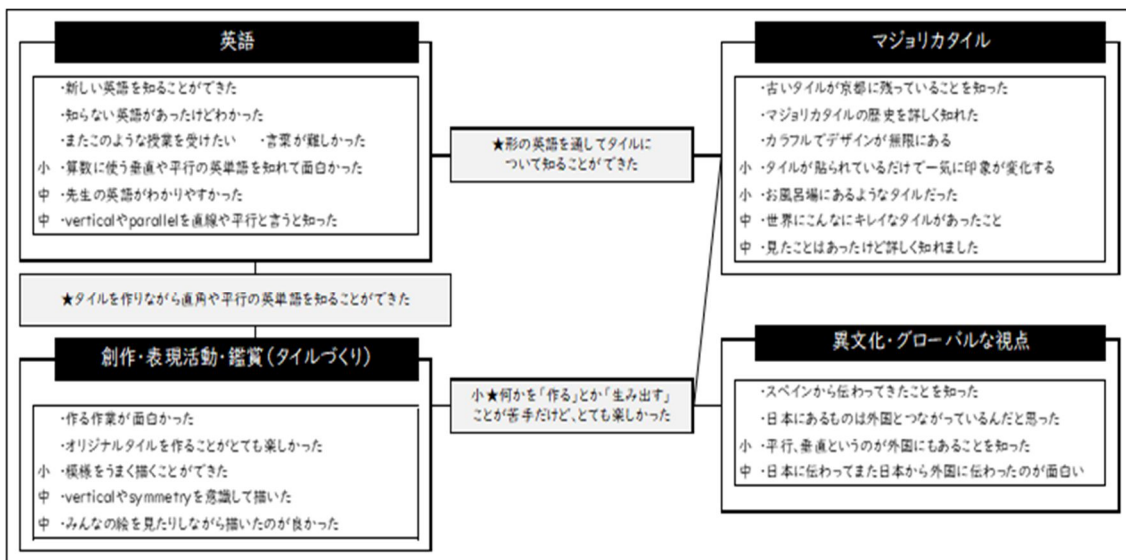


図4 授業を受けて得た学びについての記述アンケート結果図

(2) 授業で実践可能な日本の伝統文化・伝統工芸の調査

児童生徒らが見たことはあるが詳しく知らない文化・工芸品を調査し、1時間の授業で完成させられる工芸品のアイデアを集めた。また、外国にも似た工芸品があることを伝えるため、台湾、スペイン、韓国、ベトナムなどの工芸品も調査した。以下に、授業で取り組める可能性がある日本の工芸品の例を示す。

表1 授業で取り組める可能性がある日本の工芸品の例

地域	工芸品
北海道	アイヌ刺繍、アイヌ文様
東日本	樺細工、曲げわっぱ、イタヤ細工、宮城こけし、錫製品、水引細工、絵ろうそく
西日本	くみひも、注染てぬぐい、奈良(京)うちわ、マジョリカタイル、肥後てまり
沖縄	ミンサー織、紅型

(3) 教材開発

音声から文字への移行期の児童のつまづきをサポートするための効果的な教材を開発。

・絵本

音韻認識を高めるためのライミングやチャンクなどを繰り返し聞きながら文字を読みたくなるような絵本を作成した。また、音韻認識ゲームをしながら自然に文字に触れる ICT 教材を開発した。

・デジタルのストーリーブック

教科書に出てくるフレーズを使いながら別のストーリーを読み、文を並べ替えながら文構造に触れる教材の開発に携わった。

(4) 学会発表・論文発表等

本研究結果について学会発表、論文発表、ワークショップ担当し、著書を出版した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 島崎圭介・伊藤由紀子・中田葉月・松田静香	4. 巻 53
2. 論文標題 中学校の検定教科書題材に基づいたCLIL指導 - 「スパイス」と「心のカレー」 - CLIL Instruction Based on Authorized Textbook Subjects for Junior High School "Spice" and "Heartful Curry"	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 143-150
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 伊藤由紀子	4. 巻 10
2. 論文標題 ベトナムの日本語教育における日本の伝統文化CLIL指導の可能性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大阪成蹊大学紀要	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 伊藤由紀子	4. 巻 4
2. 論文標題 一人ひとりをいかすDifferentiated Instructionを取り入れた指導の提案	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大阪成蹊大学教職研究	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 伊藤由紀子・中田葉月・松田静香・島崎圭介	4. 巻 8
2. 論文標題 中学校外国語科における検定教科書題材とCLIL題材との接点と可能性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪成蹊大学紀要	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shiho Kobayashi, Yukiko Ito	4. 巻 1
2. 論文標題 Changing Attitudes of a University Physical Education Teacher Through Teaching CLIL Classes: An Interview with a Cheerleading Teacher	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Asian Journal of Content and Language Integrated Learning (Asian CLIL) Vol. 1	6. 最初と最後の頁 45-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 伊藤由紀子	4. 巻 51
2. 論文標題 小・中学校における英語の音声・文字指導のICT教材開発の取組み “世界のお米を知ろう!” Rice de Nice”	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 57-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤由紀子	4. 巻 7
2. 論文標題 英語の音声・文字指導の効果的なデジタル教材に関する教員アンケートからの一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪成蹊大学紀要	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柏木賀津子・松田静香・伊藤由紀子	4. 巻 33
2. 論文標題 How Does a Usage-Based Approach Cultivate Procedural Knowledge of the Morphological Structure (-ed): Usage Dictogloss Tasks	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 全国英語教育学会紀要ARELE	6. 最初と最後の頁 159-174
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林志保・伊藤由紀子	4. 巻 24
2. 論文標題 CLIL指導による身体表現の授業における学生の学び チアリーディングの基本と実践の学習過程から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪教育大学実践学校教育研究	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤由紀子・竹内ニコール・小谷扶左子	4. 巻 3
2. 論文標題 英語の音韻認識獲得を目指した指導による発音の向上についてのケーススタディ 2名の中学生の6年間の指導に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪成蹊大学教職研究	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊藤由紀子	4. 巻 23
2. 論文標題 中学校における英語科と技術科の連携授業の一事例 CLILアプローチを取り入れたプログラミング授業実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪教育大学実践学校教育研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤由紀子	4. 巻 -
2. 論文標題 若いパワーにあふれる街：ハノイ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Vietnam (Hanoi) CLIL Education Exchange Seminar Report	6. 最初と最後の頁 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 島崎圭介・伊藤由紀子・中田葉月・松田静香
2. 発表標題 中学校の検定教科書題材に基づいたCLIL指導 - 「スパイス」と「心のカレー」 - CLIL Instruction Based on Authorized Textbook Subjects for Junior High School "Spice" and "Heartful Curry"
3. 学会等名 第52回 中部地区英語教育学会 岐阜大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 榎本英之・佐々木緑・伊藤由紀子・デイヴィス恵美・坂井純子
2. 発表標題 短期海外研修参加者の事後変容と プログラム改善に向けた提案
3. 学会等名 第30回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 伊藤由紀子
2. 発表標題 小学校外国語科におけるCLILの授業づくり 日本の伝統文化・伝統工芸の取組み
3. 学会等名 日本児童英語教育学会 第41回小学校外国語活動・外国語科研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yukiko Ito
2. 発表標題 CLILで絵ろうそくづくりを体験しよう
3. 学会等名 CLIL Education & Communication Seminar in Hanoi, Vietnam (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 伊藤由紀子
2. 発表標題 小学校における教科書CLILおよびワークショップ
3. 学会等名 日本 CLIL 教育学会(J-CLIL), CLIL 教員研修研究所(CLIL-ite)共催
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 伊藤由紀子
2. 発表標題 世界のお米を知ろう！ ”Rice de Nice” 小・中学校における英語の音声・文字指導のICT教材の取組み
3. 学会等名 中部地区英語教育学会第50回記念愛知大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小林志保・伊藤由紀子
2. 発表標題 CLIL授業の英語での指導における大学の体育教員の意識の変容 チアリーディングの授業についてのインタビューから
3. 学会等名 日本CLIL教育学会 第3回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤由紀子・柏木賀津子
2. 発表標題 教師のTeacher Talkを育てるCLILオンライン教材 聞いて考え発話へと繋ぐスキャフォールディングを
3. 学会等名 第20回小学校英語教育学会中部・岐阜大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 赤沢真世編著（伊藤由紀子12章担当）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 教育出版	5. 総ページ数 200
3. 書名 小学校外国語科・外国語活動の授業づくり	

1. 著者名 柏木賀津子・伊藤由紀子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書出版	5. 総ページ数 118
3. 書名 とっておき！魅せる！英語授業プラン 思考プロセスを重視する [中学校・高校] CLILの実践	

1. 著者名 笹島茂・伊藤由紀子（編）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 CLIL 教員研修研究所（CLIL-ite）	5. 総ページ数 72
3. 書名 Vietnam (Hanoi) CLIL Education Exchange Seminar Report	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 CLIL Education & Communication International Seminar	開催年 2023年～2023年
--	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ベトナム	日越大学	ハノイ工業大学		